

古典落語の特殊語彙(3)

Concerning The Particular Words of "Classic RAKUGO" (3)

加藤 岳人^{*}
Takehito KATO

序

ここ数年の間に落語をめぐる状況は大きく変わってきた。テレビドラマや映画に触発されたことであろうと想像できるが、DVDやCDがセットになった落語雑誌が刊行され、手軽に入手できるようになった。おもしろいことには、どのような享受者をターゲットとするかによって演者や解説、その深さが異なっているようだが、ともかくも、手軽に口演に触れ、解説を楽しむことができるのはありがたい。

それに比べて従来の落語CDは、よほど好きな人が狙いを定めて注文するものであったように思う。『小さん落語全集』などと称して書籍とのセット販売をするものはその典型だし、CDだけのものでもセット販売は珍しくない。そうなる自動的最低四枚、多ければ十枚二十枚を一括購入することになり、とても手軽と呼べるものではなくなる。もともと、音楽CDを考えれば一枚に十曲前後が入っているだろうから、落語CDの四、五枚セットはいわば「アルバム」の役目を果たしていると言えそうだ。十枚二十枚といっても、音楽CDの複数枚アルバムがある以上、それに見合う落語CDセットがあつておかしくないわけである。

そうしたセット購入の魅力は、なんととっても意外性につきるのではないだろうか。それまで特に好きではなかった斬がある時を境に突然輝きだしたり、既知の斬と考えていたものが新しい命を吹き込まれていたり、「なぜこんなにいい斬に気づかなかったか」と慚愧に堪えぬことおびただしい。

CD付き雑誌の購読は、そうしたセット販売の長所も兼ね備えている。毎回、演者も演目も異なる一枚が届き、好みによらない斬を聴くことができるわけだ。価格も概して安いし、視覚的資料もあつて、落語を聴く楽しみが飛躍的に増し

たと言っている。

そのようなものが普及してきているのだから、落語の語彙解説などあらためてする必要はないのかもしれないが、世の流行がはかないものだという点もまた周知の事実である。雑誌の刊行も終了したようだ。「拾遺」という程度のことであっても、ここになにがしかのものは遺しておきたいと考える次第である。

一

「おう、ときに若え衆、おらあ、おめえんところへ、酒がいい、食いもののがうめえってんでへえってきたんじゃあねえよ。おらあ、はじめての客だが、ただ、おめえの声に惚れこんでへえってきたんだ……『ええ、おひとりさん、のこで一升……』……あの声が、おらあ気にいった。なにか下地があるな、おめえの声にやあ長唄がへえってる」(傍点ママ)

(講談社文庫『古典落語(続々)』)

「ずっこけ」の序段、あとひき上戸の男が繰り出すたわごとである。一升という量も量だが、昔の酒というもの、アルコール度数はそう高くなかったらしく、五合、一升という大きな升ますや盃がよく登場する。ところで、「のこ」とは何か。

「かずのこの上の部分を略した居酒屋での通言」(『日本国語大辞典』)

* 釧路高専一般教科(国語)准教授

種を明かしてしまえば単純きわまりない。干し数の子という形で保存が良く、輸送にも都合のいい、便利な肴だったであろう。

このような、省略による俗言・通言の派生はなにも古い時代の専売特許ではない。今も変わらず、あるいは現代の方がさかんに生まれている可能性もある。様々なものが生まれ、その中の一握りが生き残る、という過程を経て言葉が固定していくのだから、どの時代を見ても「現在時」の俗言は大量にあるはずだ。ただ、古い表現の方が響きや語呂はいいように思われる。しやれがきいているという点で見れば、今の省略語・俗言は古いものに及ぶべくもない。

「しつかりしろやい。いいか、一両二分と八百借りがあるんだ。そこへ一両二分持っていくんだい。八百ぐれえおんの字だ」

「なんだ？ おんの字てえなあ」

「あたぼうてんだ」

「なんだい？ あたぼうてえなあ」

「いちいち聞かない。あたりめえだ、べらぼうめてんだよ。江戸っ子でえ。あたりめえだ、べらぼうめなんかいってりやあ、日のみじけえ時分にやあ日が暮れちまうぜ。だから、つめてあたぼうてえ」 (傍点ママ)

〔大工調べ〕 講談社文庫『古典落語(続)』

「なんだい？」と聞き返しているのは与太郎であり、べらんめえ口調でしゃべっているのは棟梁である。この後、与太郎は大家のところへ家賃を払うついでにあたぼうを披露し、大いに怒りを買うことになるのだが、あたぼうが当たり前の意であることはいとして「ぼう」とは何かという、実はよくわかっていないようだ。「大工調べ」に語源が説明されているのだからそれでよさそうなのだが、落語にあらわれる語源説は一般に信頼されていない。

『日本国語大辞典』では、「ぼう」は人を親しみまたは嘲っている「坊」の意か」とあり、文政期の随筆に「あた坊という言葉が流行している」との記述があることに触れている。人を親しみまたは嘲っている「坊」とは、けちん坊、朝寝坊などの坊である。しかし、この「坊」は、その上に人の性質や性癖を示す言葉が乗っていないければ意味をなさない。「当たり前なやつ」と表現することにはいささか問題があるから、そう簡単にうなずくわけにはいかないのだ。

なお、「あたりめえだ、べらぼうめ」の「べらぼう」の方には「便乱坊」と「籠棒」の漢字があてられるが、一般の携行版国語辞典では「籠棒」のみをあてている。「籠棒」は**籠飯**(飯粒を練って作った糊)を作るための**籠飯**のこととて、飯粒をつぶすことから「穀つぶし」というしやれで相手ののしる言葉になったと言われており、このことは古典落語のマクラにもよく語られる。しかし、「へら」という音をわざわざ「べら」と濁らせることにはかなり違和感があるので、よくできたしやれではあっても納得しがたい。

一方の「便乱坊」については、江戸時代に異形の者を「べらぼう」と名付けて見せ物にしたことからきており、当時その形状と奇行がかなり話題になっていたようであるから、普通の人間ではないというほどの意味で「べらぼう」を用いることには違和感がない。

となると、『日本国語大辞典』の説、「大工調べ」の説、いずれをとっても「あたぼう」の「ぼう」は「棒」ではなく「坊」の字があてられることになり、語源的には人をさすものだと考えてよい。ただし、けちん坊の坊と同様の扱いをすることには無理があるので、「大工調べ」の説をとっておくのが穏当かと思う。「人を親しみまたは嘲っている『坊』の意か」という『日本国語大辞典』の不確かな説明も、淵源をたどればそうなる、というほどの意味だったのかもれない。

「のこで一升」にせよ「あたぼう」にせよ、いかにも江戸っ子らしい省略語だという気がする。

二

俗言の派生という点、音をひっくりかえす方法も昔から使われている。

要するに東京のかつぎや……に当たる、びんを気にする人をいいます。

この「げん」という言葉も「ぎえん」——縁起をさかさまにした洒落こ
とばです。(ちくま文庫『桂米朝コレクションI』)

現在も「業界用語」などと称してやたらに音を逆にする風はあるし、それを笑いの種にする芸人もいる。が、やはりこれも昔から言葉遊びのひとつとして

楽しまれてきたことなのである。げんが悪いという表現に至っては、落語にかぎらず日常生活にも浸透しているほど、それゆえ語源を探ろうという気さえないほど普及したもののひとつであろう。

「オーヤ、オヤ。驚き、桃の木、三隣亡。お天道様と一緒に懐中もクヤッちやったい。どうするどうする年の暮れ……。じゃねえ秋の暮れ、と来やがったネ。城下町だい、旅籠はいくらもある。軒イ並べてあるが誰アれも俺を誘わねえ。服装で懐中を読みヤアがる。流石アプロだネ。千里眼だ。こちとらの無一文ア見通してケツカル……」

『九州吹き戻し』、『立川談志遺言大全集3』

古典落語の出だしにはよくある場面である。道中で旅銀は尽きているが、できれば野宿は避けたい。ほんのわずかでもきつかけさえあればどこかの旅籠にもぐり込んでやろうという主人公の登場だ。「クヤツちやった」は文脈からして「空っぽになった」の意味だと推測できるが、これなどはとても一般的とは言えない言葉であろう。

（「やく（厄）」を逆にした語）盗人・てきや仲間などの隠語。①物事のうまいかないこと、散々なこと、役に立たないこと。また、そのさま。物事が悪いこと全般にいう。

『日本国語大辞典』の説明には右のようにあり、いわゆる業界語の一種であることがわかる。

「クヤる」とともにわかりにくいのは「無一文」のルビであろう。しかも、「きたやま」の語を直接調べると無一文という意味はどこにも見あたらないのである。

彼も猛烈な喰いしんぼうであるが、人の顔を見て、いきなり、何を喰いましょうか、なんてことはいわない。
やあ、やあ、と行って、それじゃア乗りましようか、とさりげなくホームに行く。

腹は北山だが、私もガツガツするのはよそうと思う。

『喰いたい放題』色川武大

「きたやま」が無一文につながるためには、どうしてもここを経由しなければならぬ。腹が減っていることを「北山」と言うのである。これも『日本国語大辞典』にのっているが、「来た」の意を「北」にかけていうしゃれ、という項の中に「腹が北山」を引いている。また、小学館『古語大辞典』には次のような解説を載せる。

きたやま【来た山・北山】≒「来た」に「山」を続けてしやれた語。「きた山時雨」「きた山桜」など江戸語。①（腹がきたやま」という形で）腹が減ってきたの意。②気がある、恋慕しているの意。

これに対して落語の中では語源が次のように説明されている。

喜「しかし清やん腹が減ったな」

清「さあもうぼちぼち昼かな」

喜「もう昼やる」

清「うん、お天道さんちよつとにじつてるような具合やな。しかしあんまり大きな声で腹が減った腹が減ったてなこと言いなや」

喜「なんでえな」

清「大阪者がみつともないがな」

喜「大阪者は腹減らんかえ」

清「そら大阪者でもどこのもんでも腹は減るけれども、大きな声で腹が減った腹が減ったてな、お前……お百姓に聞かれても面目ないがな」

喜「そやけど腹が減ってんのは腹が減った言わなしゃれやあない」

清「さあそこを粹言葉しゃれ言葉で言えんかちゅうねん」

喜「粹言葉しゃれ言葉いうたら」

清「つまりやな、らはが北山底でも入れよか、てなこと言うたら人に聞かれてもわからんやろ」

喜「わしが聞いてもわからん」

清「お前が聞いてもわからなんだらしようがないがな」
喜「へッなんのこつちやいな、らはがきたやま」

清「つまりな、はらをひっくり返してらはや、北山はすいて見える……：はらが減った、らはが北山、底でも入れよか、飯でも食おかこうなるねん」

「伊勢参宮神之賑」（ちくま文庫『桂米朝コレクションII』）

上方落語を取り上げ出すとなじみのない言葉が多くなりすぎるので、基本的にはここで扱わないことにしているのだが、「北山」が京都のものである以上、ここは敬意を表して上方ものに登場していただく。「伊勢参宮神之賑」はあまりなじみのない噺かと思うけれども、「七度狐」につながる噺であって、実際に「七度狐」でも同じ場面が語られている。ここに引用した部分の続きには、体の部分名称をとりあげて音を逆にする言葉遊びがあり、ごく一般にそれが広まっていることを覗わせる内容である。

さて、ここに語源はあるものの、「北山はすいて見える」ということがすてにして解りにくい。

「北山」は京都北方の諸山をさす言葉で、特定の山をいう語ではない。つまり、重なり合って見えている山々全体が北山なので、「すく」は「透く」であり、隙間を作ってまばらに見えている様をいうのである。古語の「透く」は四段活用動詞だから、「透きて」が「透いて」と音便化し、「北山はすいて見える」ということになる。このように、空間を作った状態が「すく」という動詞と深く関わっていることを考えると、「腹が減る」ことを「腹が空く」と表現することも、北山はすいて見えるという表現と、意味の深いところでつながりをもつことがほの見えてくる。

ここまで原義を考えた上で「無一文」に戻ろう。といつても、既に説明は不要かもしれないが、空間ができていて、隙間があることを「透く」「空く」といい、その連想から「北山」になるのだから、懐中が空っぽになることをも「きたやま」と言うことができるのである。説明しなければ解らないようなしゃれ言葉を使うあたり、いかにも落語的であって、言葉遊びの粋という思いがする。

ただし、辞書類ではこの落語的解釈を採用しない。あくまで「来た」の意のしゃれだという立場をとっているわけだが、これでは消化不良の印象をぬぐえ

ないのではないか。

三

あらためて『日本国語大辞典』の「北山」を見ると、

㊦ 気があること。㊧ 衣服などがいたみ弱ること。㊨ 腹が減ること。空
腹であること。

となっており、また、「北山時雨」の項にも、②の意味として、

「北」に「来た」をかけていうしゃれ。㊦ こちらの思惑どおりになつていくこと。㊧ 気があること。㊨ 空腹を催すこと。

とある。㊨の用例のひとつには「はらがきた山しぐれとなつて来た」をあげてあるのだが、「北山時雨」が「来た」の意だとすると、この用例では既に語源にまつわるイメージが失われていることになる。これでは同語反復になつてしまふからである。そうして、「北山」の㊦、「北山時雨」の㊧、「気があること」の意味は通じにくい。

一方の落語的解釈ではどうかというと、「すいて見える」の「すいて」を「好いて」とするだけで通じてしまうのではないか。また、「北山」の㊧「衣服などがいたみ弱ること」の意味としても、布地が弱って透けて見えるほどになつたり、あちこち穴が空いたりすることを考えれば、本来の「透く」の意とすると実に単純にイメージがつながる。

もつとも、落語的解釈では「北山時雨」の㊦「こちらの思惑どおりになつていくこと」という意味にはつながりにくい。しかし、全体を眺めたときどちらの解釈がふさわしいかと考えると、落語に軍配が上がるように思えてならぬ。

落語に語られることには、「しゃれ」るあまりに無理矢理こじつけるようなものも確かに多い。その上、言葉の意味は時代を経て変わっていくものだから、使われ方も変わっていくのが普通である。もともとの語義が失われてい

くこともあろう。

しかし、ここで見てきたように落語に優勢判定をしたい場合もあり、また、後の時代のこじつけだったとしても、それがこれほど見事に言葉をつなげていくものならば、やはり素晴らしいものだと言わねばならない。辞書の解釈を否定するまでには至らなくても、落語的解釈のセンスの良さは伝わるのではないかと思う。